#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『和歌無底抄』諸本の考察
Sub Title	The variant texts of "Waka-muteisho"
Author	舘野, 文昭(Tateno, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2014
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.49 (2014. ) ,p.279- 312
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20140000-0279

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『和歌無底抄』諸本の考察

## 舘 野 文 昭

はじめに

称する人々がいて、これらの書を作成したと考えられるので、 の諸書の性格について、「為世を取り巻き、為世を頭に頂くと が関係していたという奥書類があ」るということから、これら が関係していたという奥書類があ」るということから、これら が関係していたという奥書類があ」るということから、これら の諸書の性格について、「為世を取り巻き、為世を頭に頂くと の諸書の性格について、「為世を取り巻き、為世を頭に頂くと

輪氏が「和歌無底抄系」とする書に焦点を絞り、その諸本の問して位置づけている。本稿では、このうち『和歌無底抄』(三為世流の書と称してよいもの」とされ、「為世流」の秘伝書と

題について考察するものである。

(古典ライブラリー、二〇一四)は、次のように説明している。 典である『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』 一八六五)『和歌無底抄考』以来、現在まで研究が積み重ねら一八六五)『和歌無底抄考』以来、現在まで研究が積み重ねら

書名は延宝(1673~81)

刊本による。

同本は十巻本で

【鎌倉期歌学書】基俊に仮託された伝書。『和歌無底抄』の

①巻一~四は四季の題の詠みかたを詳しく述べたもので、 『八雲御抄』に拠るところが大きい。②巻五~七は『悦目抄』

容の写本は書名を『和歌大綱上眇抄』(宮内庁書陵部蔵など) に同じ、③巻八~十は『上眇抄』と同じで、人丸奉行念誦 伊勢物語極秘、 古今和歌序などとなっている。同内

抄』から成る本 部分がないもの(広島大学蔵)、 (筑波大学蔵本) などがあり、伝来は複雑 『悦目抄』と『上眇

とする。ほかに『一子伝』という名の書があり、中間の『悦

である。

【参考文献】『国文学の文献学的研究』佐佐木信綱(岩波書 1935)\*『歌学秘伝の研究』三輪正胤(風間書房

なっている。また波線部の通り、その諸本は非常に複雑な様相 線部①~③の通りに全体が三つの部分に分けられ、その第二の 言って良い。本書は、藤原基俊仮託の歌学秘伝の書であり、傍 これが、現在の研究状況における本書に関する基本的認識と 『悦目抄』を含む、より大部の書物ということが明らかに 『悦目抄』と同じ内容となっている。即ち、『和歌無底抄』 (紙宏行氏執筆、 傍線・波線は引用者による)

を呈しており、三輪氏が有益な見取り図

(後述)を提示しては

ぞれ内容①②③と呼ぶこととする。

その原初的な性格はどのようなものであったのかを探りたい。 容解明の一階梯として、『和歌無底抄』諸本の比較を通して、 いるものの、まだ考究すべき問題は多く残されている。その全

る、延宝四(一六七六)年の刊記を持つ版本が底本となってい

一九五六)に収録されるが、所引の辞典項目でも言及されてい

また、『和歌無底抄』は『日本歌学大系』第四巻(風間書房)

る。この延宝版本は十巻構成で、巻五~七が『悦目抄』に相当

する。『日本歌学大系』においては、この『悦目抄』相当部分

すべし、ということのようである。この『日本歌学大系』 本文が唯一の活字化されたテキストであり、 研究者の間で流布

目抄』も収録されるので、巻五~巻七についてはそちらを参照 を省略して翻刻が為されている。『日本歌学大系』同巻には、

のかを明らかにしておく必要もあろう。その点も併せて検討し 底抄』諸本において、どのような位置付けが為され得るものな 本的地位を得ている以上、その底本たる延宝版本が、 『和歌無

くが、その際、先の引用部に付した①~③の三つの部分をそれ 本稿では、『和歌無底抄』の内容の出入りについても見てゆ

てみたい。

### 一、序文について

諸本の内、内容①を持つ伝本の多くは、①の前に真名と仮名のまず最初に、『和歌無底抄』の序文について説明しておきたい。

の全文を引用しつつ確認をです。 る際に重要な情報が含まれているように思われる。ここで両序る際に重要な情報が含まれているように思われる。ここで両序の字を持つ。この序文には、『和歌無底抄』諸本について考え

の全文を引用しつつ確認を行う。

まずは真名序を掲げよう。

夫和謌者、我朝之風俗、興自神代盛人代、詠物也、専素艶

真底。誠及澆季、既絶知人。悲哉々々。難波津之遺流、浅時至、毎望詠花嘯月之宴、染筆採餞之砌、伺之欽之、未得雖加披見、面々綜緭、難息停滯。因茲、始於曩昔、迄于当雖加披見、面々綜緭、難息停滯。因茲、始於曩昔、迄于当雖加披見、面々綜緭、難息停滯。因茲、始於曩昔、迄于当雖加拔見、面々綜網、難息停滯。因茲、始於曩昔、迄無對、之間,以

れぞれどのような構成をとるかの説明は無い。示される点には注意しておきたい。ただし、ここでは三巻がそが、最後に「三巻書」とあり、この書物が三巻から成ることがしては典型的なもので、特に変わったところがある訳ではない

ら筆を起こし、本書撰述の経緯を趣旨を述べるという、序文と

一方、仮名序は次の通りである。

野又心をたねとするがゆへに、人の哥にすこしきかはらずらしける詞もなく、つゞけ残したる風情もなし。代のすゑらしける詞もなく、つゞけ残したる風情もなし。代のすゑ好心をたねとするがゆへに、人ごとに心かはる物なれば、知和歌と云は、神代より始て今に絶る事なければ、いひも抑和歌と云は、神代より始て今に絶る事なければ、いひも

春夏秋冬につけて、春は花をもてあそび、夏は神南備山の和歌式にみえたり。代もあがり、人の心もたくみなりし時、る鳥の翅おひざらんがごとし。凡哥のおこり、古今の序、まず。たとへば、水にすむ魚のひれをうしなひ、空をかけ

このみ詠べけれども、情あるものは進み、情なきものは准ものをや。かるがゆへに、高も卑も秋津嶋に生れん物は、

郭公を待、秋は立田山の紅葉をおしみ、冬はたかねの雪を

内容は、そもそも和歌とはどういうものか、というところか

香山之芳躅、衰干今、癈於是。仍為瀝細流、遷古風、三巻

所注如件。

の望にくらし。藝なく能かけたり。なす事もなくて、いた ば、糸竹の曲にうとく、秋の蛍の光をあつめずして、風月 たなき身をかへりみるに、春の鶯のさへつりをまなばざれ 詞をかざらず、たゞまことのためしをあつむ。たゞし、つ もふがゆへなり。又きかんもの、耳ちかくして、むなしき につけて、ことにのぞみ、思をのぶるにつけても、のこる づらに露霜ををくり、鳩の杖にすがれり。かゝるにつけて ずしも筆のつひへをからず、みんものゝ目やすからんをお なる心をさとらしめんがために注しをく所なり。是かなら ふしなかるべし。夫哥にあまたの姿をわかち、八の病を注 をあはれとおもひ、旅の別をおしみ、世中のうつりかはる おもしろしとおもひ、君を祝ひ、我身を愁へ、いもせの中 九の品をあらはして、いとけなき者をおしへ、おろか

> 雑の残れるふしもなし。下巻もて灌頂の巻とする也 るべし。 勢物語の極秘哥、 大綱・一目・上眇抄、 古今の哥を明に注す。 古今序、 是なり。 此三巻に名字三あ 初心の部には四季

奥儀、

不可得極秘哥、

**六義、** 

四病八病

人丸或伊

し、書物の撰述の動機、さらに書物の構成を説明するという。

そもそも和歌とはいかなるものか、という話題から説き起こ

の目的を「為瀝細流、遷古風」とするが、仮名序では「いまだ 両者は対応関係にあるものではない。例えば、 真名序よりも長文であり、説かれる内容にも聊か異同が見られ 典型的な形式の序文であるという点では真名序と同じであるが 真名序では撰述

ので、仮名序の方が、奥書と対応しているようである。 原基俊に仮託された奥書には「為末代嬰児」という文言がある

にはそれぞれ別々に成ったものである可能性もあろう。

立については謎が多いが、あるいはこの二つの序文は、始原的

此道にうとからん嬰児のためしるす」と言っている。

その三巻について解説されるのである。これによると、三巻に 真名序ではただ「三巻書」とあるのみであったが、仮名序では さて、問題は傍線を付した、「付名に…」以下の本文である。

には、 和哥会作法、

和哥序、文字仕、

題目証哥を注す。大綱之大綱に、

とからん嬰児のためにしるす所なり。付名に、大綱初心・

大綱之大綱・引括といふ。此三巻は以名字可秘也。

初心部

は、藻塩草かきあやまれることのはも数つもり、梓弓ひき

みん人の嘲もはづれがたくおぼゆれども、いまだ此道にう

れがどのような内容を持つのかということについて、具体的に 付されている。多分に秘伝的な名称ではあるが、さらにそれぞ

ただし、実際の内容と、ここで述べられている構成とは 一致

述べられている。

を見ると、内題を「大綱初心」とする点こそこの序に合致する 歌」が記されていなければならないのであるが、実際の内容① しない。仮名序に従えば、上巻には「和歌序、文字仕、題目証

の内容とされる、「哥奥儀、不可得極秘哥、古今序、六義、四

ては、本書のどこにもこれに相当する内容は存在しない。下巻 中巻の内容とされる「和歌会作法、由緒并証歌・連歌」につい ものの、その内容は四季題の読み方について述べたものである。

ない。諸本を見ても、仮名序の述べる内容を備えるものは見当 度は本書の内容③と重なるものの、完全に符号している訳では 病八病、人丸或伊勢物語の極秘哥、古今の哥」に関して言えば、 「古今序」「人丸或伊勢物語の極秘哥」といった辺りは、ある程

難である。猶、延宝版本も仮名序を有するが、傍線部分は脱し 在したのかは不明であり、現在の伝本状況から推測するのは困 この仮名序が述べる通りの構成をとるテキストが原初的に存

ている。

#### 『和歌無底抄』 問題点 諸本に関する先行研究と

以上のように、本書の序文は大きな問題を孕んでいるのである。

究と、その問題点について記しておきたい。これについては別 つづいて、『和歌無底抄』を含む、『悦目抄』 系歌論の先行研

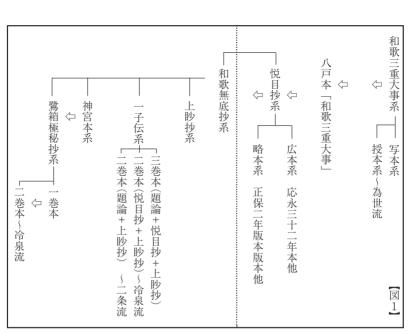
稿で述べたところでもあるが、行論の都合上、 した見取り図を示されている。その図を本稿に関わる部分を中 『悦目抄』系歌論の諸書を精査して、その諸本整理を端的に表 三輪正胤氏の研究である。三輪氏は「為世流」の秘伝書として 現在、『和歌無底抄』の研究水準を示しているのが、先述の 再説する

が底本とする応永三十二年本は前者、 される。『悦目抄』には広本系と略本系とがあり、『日本歌学大系 が成り、 即ち、『和歌三重大事』を原拠として『悦目抄』 それが増補改訂されて和歌無底抄系の諸書が成ったと 版本等が後者となる。必

心に単純化すると【図1】の通りである。

ずしも題が一定しておらず、これらの諸本については、どこま

283



でを同一書目、どこからを別書目とするか、その認定が非常にでを同一書目、どこからを別書目とするか、その認本として捉えたい。猶、『和歌無底抄』を、この諸本全体を包括する通行書名とすることは、実は非常に問題があるが、を包括する通行書名とすることは、実は非常に問題があるが、を包括する通行書名とすることは、実は非常に問題があるが、でを同一書目、どこからを別書目とするか、その認定が非常にでを同一書目、どこからを別書目とするか、その認定が非常にでを同一書目、どこからを別書目とするか、その認定が非常にでを同一書目、どこからを別書目とするか。

で捉えられているものの、冷泉流も諸本の生成伝来に関与したに分類している。『和歌無底抄』は、「為世流」という大枠の中【図1】の通り、三輪氏は『和歌無底抄』諸本を四系統七種

形跡があり、その諸本の状況が、複雑なものとなっていること

二巻本(題論+上眇抄)に属する重要伝本を、紹介、考察してたものであり、基本的に首肯出来るものである。因みに、【図たものであり、基本的に首肯出来るものである。因みに、【図が示されている。この分類・整理は諸本を精査した上で為されが示されている。この分類・整理は諸本を精査した上で為されが示されている。この分類・整理は諸本を精査した上で為された。

いる。龍谷大学図書館蔵本『大綱初心』(写字台文庫、函架番(キキゥ)

号 021 である。内容①②③のうち①と③を持ち②を欠くものであるが 392 — 刪 以下龍大本と称する)という伝本がそれ

甘露寺親長 (一四二四~一五〇〇) 筆、足利義尚(一四六五

本文冒頭(①の前)に真名・仮名の両序を備える。龍大本は、

照されたいが、 ある。『悦目抄』および龍大本の奥書構成は後掲の 四八九)所持本という、書写年代も古く、素性の良い伝本で 〈表〉を参

が伝来に関与したという奥書が付されることが知られている。 『和歌無底抄』版本等にも、その『悦目抄』と同文の為氏・為

『悦目抄』には、為氏・為世らの二条家関係者

世の奥書がある。しかし龍大本には、為氏・為世という二条家

関係者の奥書が無い。その点に注目した部矢氏は、『和歌無底抄』 『悦目抄』を敷衍して成ったという通説を疑問視する。さら

に龍大本の仮名序が述べる中巻の内容構成と『悦目抄』の内容

は近世になって入れられた可能性が強く、「大綱の大綱」(中

本が何れも近世以降のものであるということを指摘し、「『悦目 が一致しないという点、①と③の間に、②『悦目抄』が入る伝

以降からと考えられる」と主張する。 巻のこと。序文参照※引用者注)を『悦目抄』とするのは近世

つまり、

部矢氏は、

『和歌無底抄』

は、

元々は

『悦目抄』と

付名に大綱初心・大綱之大綱、大綱之引括といふ。

る。この部矢氏論は無視できない見解であろう。 が挿入された結果、版本の如き形になっているとするのであ は別個に成立し、 ただし、龍大本も奥書は明らかに『悦目抄』と同文であり 近世になって、三巻相当の二巻目に

||悦目抄

無関係に成立したとは考えがたい。試みに龍大本と『悦目 がともに持つ釈阿奥書を比較してみよう。 龍大本 悦目抄

こにかくしてひろうあるま | るまじく候。あなかしこ、 師匠 じく候 づりたてまつり候。 きかせず候。ふかく箱のそ よりほかは人に名をだにも のためにて候。これは羽林 より相伝の秘 書 御心え 巻ゆ |だにも聞かせず候。 譲候。 |箱のそこにかくして披露あ 是は羽林より外は人に名を 師匠より相伝之秘書 御心得のためにて候。 ふかく 卷

物であることになる。 もに傍線部のように一一巻」とあり、 「三巻書」とあり、また仮名序の書物全体の構成を述べた部分にも、 両者は同文であり、 しかしながら、龍大本の真名序を見ると 本文的影響関係は明らかである。 一巻乃至不分巻構成の書 両者と

は以名字可秘也。 (中略) …此三巻に名字三あるべし。

す伝本であることが確認出来れば、その奥書に二条家関係者の

大綱・一目・上眇抄、是なり。… (後略

批判にそのまま利用したものであると考えるのが妥当であると いうことは、龍大本に存する奥書は、 歌学書で、「一巻」と称しても問題の無い構成をしている。と ると見た方が自然である。一方『悦目抄』は本来的に不分巻の ており、「一巻」というより「三巻」のうち一巻が失われてい その構成は前半①と後半③とで明らかに違った内容・形式となっ 巻」という言辞と矛盾する。龍大本は一冊本ではあるけれども、 と自ら「三巻」構成であることを謳っており、釈阿奥書の「一 『悦目抄』のそれを、 無

存するから、『悦目抄』との接触を江戸期とする部矢氏説には 目抄+上眇抄) 響を受けているものと考えたい。猶、三輪氏分類の二巻本 いても『悦目抄』の影響を受けたと思しき奥書が付いているの で、『和歌無底抄』は、 の伝本には室町期の書写本と推定されるものも その生成過程において『悦目抄』の影 (悦

思われる。『和歌無底抄』諸本を見ると、どの系統の伝本にお

善本であることは間違いない。龍大本が諸本の中でも古態を示 とはいえ、龍大本が 『和歌無底抄』研究にとって重要な古写

底抄

やはり従えない。

とになるからである。そうなると、「為世流」の伝書として位 す奥書を持っているので、『和歌無底抄』に 置づけられている『和歌無底抄』は、 を取り込む際、意図的に為氏・為世の名が削除されたというこ 目抄』は原則として伝来に為氏・為世が関与していることを示 名が見えないという事実は重要な意味を持つことになる。『悦 相伝の秘書に為氏・為世が関わっていたら都合が悪いと考 本来的には二条流とは別 [悦目抄]

この点について、諸本比較から考えてみたい。 『和歌無底抄』は原初的にはどのような場で生成したものか う疑いも生じるのである

えるような人々によって創出・享受されたものではないかとい

### 三、『和歌無底抄』 諸伝本について

概観しておきたい。先の 対象となる『和歌無底抄』諸伝本について、 検討に先立ち、三輪氏の整理を参考にしつつ、本稿の考察の 諸本を、「上眇抄系」・「一子伝系」・「神宮本系」・「鷺箱 【図1】の如く、三輪氏は、『和歌無 簡略にではあるが

ている。以下、上記の七種について便宜的にi~iiと番号を付上眇抄)の三種に、「鷺箱極秘抄系」を一巻本・二巻本に分け上眇抄)の三種に、「鷺箱極秘抄系」を一巻本・二巻本(題論+から、内容①②③を備える三巻本(題論+悦目抄+上眇抄)、極秘抄系」の四系に分け、「一子伝系」をさらに内容の出入り

どのような伝本が確認出来るのか、確認しておこう。

i上眇抄系

目抄+上眇抄)の内、③の部分を分離独立させたものであるこ達郎氏本、神宮文庫本を挙げる。何れもiii一子伝系二巻本(悦の内容のみを持つものである。三輪氏は宮内庁書陵部本、片野三輪氏が「上眇抄系」と名付けたのは、内容①②③の内、③

とが三輪氏により以下の通り指摘されている。

ものである。これは三一子伝系二巻本(悦目抄+上眇抄)の内目抄+上眇抄)の内容②の末尾に存する独自異文二項目と同じ目を記している。この二項目は、後述する三十子伝系二巻本(悦東の秘歌」という二項目を記し、片野本は「人丸の秘歌」の項書陵部本はその前に「万葉の歌は安きをかくし…」および「人書を記し、内容③は「人丸奉行念誦次第」から始まるが、この内通常、内容③は「人丸奉行念誦次第」から始まるが、この内

以下、

現在確認し得た伝本は次の通り

離独立させたものであると考えられるのである。また、神宮文庫本は奥書にヨー子伝系二巻本(悦目抄+上眇け)に属する筑波大学図書館本と同じ奥書を、誤読しながら写抄)に属する筑波大学図書館本と同じ奥書を、誤読しながら写

る際には、考察の対象から除外して差し支えないと言える。そ目抄+上眇抄)に遅れて生じた系統であり、原初的形態を考え

このように、i上眇抄系というのは、

ⅲ一子伝系二巻本

ii一子伝系三巻本

のため、

〈表〉にはこの系統の伝本は掲げていない

『和歌無底抄』諸本において、内容①②③を全て備えているものはこの系統に属する。版本『和歌無底抄』もこの類である。ものはこの系統に属する。版本『和歌無底抄』もこの類である。内容②が『悦目抄』である。また、内容①の前に真名・仮名の両略本系『悦目抄』である。また、内容①の前に真名・仮名の両略本系『悦目抄』である。ただし、版本(6)及びその転写序を持つという特徴がある。ただし、版本(6)及びその転写を持つという特徴がある。ただし、版本(6)及びその転写を持つという特徴がある。ただし、版本(6)及びその転写を持たない。

1国会図書館蔵 『基俊和歌口傳抄』 三巻三冊 200

45 [江戸時代中後期頃]

2九州大学図書館蔵『和歌大綱上眇抄』 三巻三冊

或

文·26 B·27 〔江戸時代中期頃カ〕

3宮内庁書陵部蔵『和歌大綱上眇抄』 三巻三冊

鷹 136

嘉永六年鷹司政通令書写

4宮城県立図書館伊達文庫蔵 『和歌大綱』 三巻三冊 伊

911 201 . 〔江戸時代中後期頃カ〕写

5篠山市青山会蔵

『和歌大綱』

三巻三冊

327

〔江戸時代

ⅱ一子伝系二巻本(悦目抄+上眇抄)

中後期頃カ〕写 延宝四

6版本『和歌無底抄』 年江戸林左兵衛刊 十巻十冊または十巻三冊

7國學院大學図書館 [江戸時代中後期頃] 写 版本の転写本 『和歌無底抄』 十巻三冊 IV • 5889

8東京大学国文学研究室蔵『和歌無底抄』 十巻三冊

奥書等から明らかに言の諸本と同系統であり、言とは異なる。 以下の二本は、内容①及び真名・仮名の両序を欠くが、本文・ 文化六年写 版本の転写本(準点)

後述するように、これは元々内容①②③完備していたが、何ら

には分類しなかった。

たことにより生じた伝本と思われる。 かの事情で①及び真名・仮名の両序の落ちてしまった本を写し

9群馬大学図書館新田文庫蔵『基俊和歌口傳』

. F 68

[江戸時代中期頃]

10大東急記念文庫蔵 N 911 · 101 『基俊和歌口傳』 二巻二冊 41

1 2 2975 〔江戸時代後期頃〕 写 (群馬大本の転写本

この類からは、1・6・9をⅢ・Ⅳ・Ⅲとして〈表〉に掲げた。

この類に属する伝本内容②は、略本系『悦目抄』ではなく広本 『悦目抄』に近い本文を持つものであるが、歌学大系本とは 『和歌無底抄』諸本において、内容②③を持ち①を欠くもの。

わり、末尾に「一、万葉集の哥は」「一、人丸の哥」の二項目 (『日本歌学大系』 一七五頁三行目) 以下の本文を欠き、そのか

大きく異なる点として、「一、又憚るべき名所ならびに詞の事

ているものの、②の本文に右の如き特徴は見られないので、iii 学本やその転写本である大東急本も②③という内容構成となっ を独自異文として付すという特徴がある。 iiに分類した群馬大

先述の通り、 i上眇抄系はこの系統の伝本から内容③の部分

存在を確認し得る伝本は次の通り。

を独立させたものである。

1佐々木孝浩氏蔵『和歌』

綴葉装一帖

[室町時代中期頃]

写

代前期頃〕写

2 筑波大学図書館蔵 『一子伝』

\_ 册

ル 205 ・ 72

〔江戸時

3陽明文庫蔵『上眇抄』 二巻一冊 後期頃〕写 近 243 · 31 〔室町時代

この類からは室町期の書写本である1・3をⅣ・Vとして

に掲げた。

ⅳ一子伝系二巻本(題論+上眇抄

真名・仮名の両序も備える。 『和歌無底抄』諸本において、内容①③を持ち、②を欠くもの。

存在を確認し得た伝本は次の七点である。

1龍谷大学図書館蔵『大綱初心』 露寺親長〕写 足利義尚所持本 

021

392 1

甘

2国立国会図書館蔵『大綱初心抄』 冊 237 100

江

神宮本系

戸時代前期頃〕写 久世家旧蔵

3広島大学国文学研究室蔵 『一子伝』 — 冊

国 文 N 3523

〔江戸時代中後期頃〕 写

4東京大学附属図書館蔵 『大綱初心抄』 — 册

A 00

6042

₩

5東海大学桃園文庫蔵『大綱初心/伊勢物語極秘』 [江戸時代前中期頃] 写.

桃 3 · 4 [江戸時代後期頃] 写

6彰考館蔵『一子伝』一冊 日 18 | 07479 〔江戸時代前期頃カ〕

写

7慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 『一子伝』 [江戸時代中期頃] 写 柳原家旧蔵・久 一冊

尚自筆所持奥書と同じ奥書を、本奥書として持つ。ここでは書 4東大附属図書館本・5東海大桃園文庫本は何れも龍大本の義

1龍大本は前節で言及した伝本である。2国会本・3広大本・

曽神昇氏旧蔵

尚の奥書の見えない6を、それぞれⅡ・Ⅲとして〈表〉に掲げた。 写年代も古く、素性も良い伝本である1と、参考資料として義

備考	書写				構成	奥書					外題	是是	与 夏	内容	函架番号	所蔵		(表) ※
一冊または二冊。		れ以降は諸本により様々)	為世奥書	7正安元年二月十七日・	6起請文	5為氏奥書	4妙阿奥書	3藤原氏奥書	2 釈阿奥書	1基俊奥書	「悦目抄」等		基本的ナシ	2		(『悦目抄』)	Ι	※内容の①は『和歌無底抄』
	〔甘露寺親長〕写		自筆花押	6足利義尚筆所持奥書:	前上総介範政	5応永廿六年九月九日・	4藤原氏女奥書	3 釈阿奥書	2基俊奥書	1起請文	大綱初心	③「和歌灌頂に有覚」	①「大綱初心巻第一」	真仮①③	021 392 1	龍谷大学図書館	II	巻一〜四、②は五〜七、
写真版を閲覧。	江戸前期頃写カ						4藤原氏女奥書	3釈阿奥書	2基俊奥書	1起請文	一子伝	③「和歌灌頂に有覚」	①「大綱初心巻第一」	真仮①③	日 18   07479	彰考館	III	③は八~十相当部分。真は
	室町中期頃写	(後) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金) (金	書之(本奥書)	6文保元年八月廿二日	5相伝系図	の藤原氏女奥書に同じ)	4無署名相伝奥書(他本	3釈阿奥書	2基俊奥書	1起請文	和歌	③「和哥灌頂に有覚」	_ ② ナシ	2 3		佐々木孝浩氏	IV	真は真名序、仮は仮名序。
二二卷。一冊。	室町後期頃写			7 花押の模写	6千松末葉正徹奥書	5 (尾題)	4藤原氏奥書	3 釈阿奥書	2基俊奥書	1起請文	上眇抄〈悦目抄トモ〉	抄下/和歌灌頂に有覚」	②「上眇抄上」③「上眇	2 3	近 243 · 31	陽明文庫	V	

			1	
	V	VI	VI	IX
所蔵	内閣文庫	群馬大学附属図書館	国立国会図書館	版本「和歌無底抄」
函架番号	201 • 748	N 911 · 101 · F 68	200 · 3 · 45	(日本歌学大系底本)
内容	2 3	1 3	真仮①②③	仮(1)(2)(3)
	ナシ	②「基俊和歌口伝」	①「大綱初心巻第一」	「和歌無底抄巻第
内題		③「和歌灌頂に有覚」	②ナシ	一名一子伝」「和歌
			③「和歌灌頂に有覚」	抄卷第二 (~十)」
外題	悦目抄」) 別括鈔(朱筆「又号	(朱筆「又号 基俊和謌口伝	基俊和歌口伝抄	和歌無底抄
	1起請文	1~7まで『悦目抄』	1~10まで群馬大本と 1~7まで	1~7まで『悦目抄』と
	2基俊奥書	と同じ。	同じ。	同じ
	3 釈阿奥書	8義尚奧書		8延宝第四仲夏日/ 林左
	4かろく藤氏奥書	9応永廿六年九月九日、		兵衛板行(もしくは「林文
	5弘安二年妙阿奥書	前上総介範政奥書		蔵板行」)
<b></b>	6正安四年七月下旬奥書	10従三位長治奥書		
相反	7 (建武二年)前内大臣奥書	11天明二寅年五月吉旦、		
	8文明元年九月四日	源孝純/源温純奥書(後		
	9天台隠士鎮海奥書	筆)		
	10元禄十六、玩歌齋/			
	嘉臥奥書			
書写	元禄十六年写	江戸中期頃写	江戸中後期頃写	延宝四年刊
備考	一冊。②③本文は特異な   上下二巻。二冊。		三巻。三冊。	十巻。十冊または三冊。

内容②③を持つが、②も③も他系統の諸本と比して、特殊な

構成・内容となっている。 伊勢神宮に伝来したことを示す奥書を有するという特徴があ

伝本としては、次の二本が確認されている。

1内閣文庫本蔵『引括抄』

— 冊

201 · 748

元禄十六年嘉

2名古屋大学蔵 年宋竹入道写 『悦目集』一冊 W 皇 911 E 0 天文三

には1をⅥとして掲げた。

·コ鷺箱極秘抄系一巻本・;コ鷺箱極秘抄系二巻本

先の【図1】の矢印が示す通り、神宮本系が変容して生じた

本が増補されて成ったと思しい。三輪氏は、一巻本として、天

系統と考えられる。一巻本と二巻本にわかれる。二巻本は一巻

理大学図書館本、東京大学図書館本、中央大学図書館本、国文

態の考察の際は除外して良いものと思われるので、この系統の 内庁書陵部蔵伏見宮本、三輪氏蔵二本を挙げている。原初的形 学研究資料館寄託久松本、中田光子氏蔵本を、二巻本として宮 〈表〉には掲げていない。

> 四、『和歌無底抄』 諸本の内容・奥書比較

さて、『和歌無底抄』の諸本を比較することで何が見えてく

るだろうか。

して『和歌無底抄』諸本の、題、 〈表〉として、Ⅰに『悦目抄』の奥書構成を記し、 内容、奥書について整理した II 「X と

いが、『和歌無底抄』の原初的形を十分考察することが可能で 表を掲げた。ここに挙げた伝本は全体からすると一部に過ぎな

態をとどめるものではないと考えられるので、ここでは省略し た。また、この〈表〉では「奥書構成」については、どの本に ある。前節で述べた如く、三輪氏の整理でいうi上眇抄系と ▽・∵≌籍極秘抄系は、何れも『和歌無底抄』諸本の原初的形

本文の忠実な引用を目的としていない点、諒とされたい。以下 どのような奥書が存するかを一覧するためのものであり、奥書

この〈表〉に基づいて考察をすすめてゆく。

本的に〈表〉で示した1の基俊奥書から7の為世奥書までは 『悦目抄』の奥書に関しては、諸本により様々であるが、基

諸本ともに持つ。1~7までを完備しない伝本も存するが、そ

ていたと考えられる。つまり『悦目抄』を二条為世流の秘伝書れは転写の過程で省略されたもので、元来は1~7まで完備し

では、『和歌無底抄』諸本も為世流の秘伝書と呼んで差し支と呼ぶことは問題ないと言える。

付けについても考えてゆきたい。歌無底抄』の原初的性格を考察し、版本『和歌無底抄』の位置えないものなのだろうか。かかる問題意識のもと、以下、『和

この表に挙げていないもので國學院大學図書館本、東京大学国この題を持つのは、区延宝版本のほか、写本で確認し得たのは、まず、『和歌無底抄』という題を持つ伝本について見てみよう。

て良いかと思われる。そうであれば、『和歌無底抄』という題も、題を持ち、十巻構成をとるのは、版本に由来するものだと考えともに版本の転写本と見て間違いない。『和歌無底抄』という文学研究室蔵本があるのみである。何れも十巻構成をとるが、

とるものであると見做し得るものであり、諸本の原初的形態の本及びその転写本)については、近世になって整えられた形を以上を勘案すれば、『和歌無底抄』という題を持つ諸本(版

である可能性が高い。

成立当初からの題では無く、

あるいは版本化の際付されたもの

考察に際しては、ひとまず除外しても問題ないと思われる。

現在この歌学書は『和歌無底抄』という題で通行し、文学辞

近世期に成立したと考えられる版本系諸本にのみ用いられてい典等でもこの題で立項されている。しかしこの題は先述の通り、

適切な書名が見られないため、本稿では『和歌無底抄』を通行るのは聊か問題があるだろう。しかしそれに代えて用いるべきるものである。したがってこの『和歌無底抄』を通行書名とす

五、未改編奥書本と改編奥書本

書名としておく。

表して龍大本の、奥書を掲げよう。煩瑣を避けて、一部省略し近いものであろうか。前者を代表して国会図書館本、後者を代近いものであろうか。前者を代表して国会図書館本、後者を代近いものであろうか。前者を代表して国会図書館本、後者を代系諸本の奥書に注目すると、Ⅷ群馬大本・Ⅷ国会本といった、系諸本の奥書に注目すると、Ⅷ群馬大本・Ⅷ国会本といった、系諸本の奥書に注目すると、Ⅷ群馬大本・Ⅷ国会本といった、系諸本の奥書に注目すると、Ⅷ群馬大本・Ⅷ国会本といった、系諸本の、奥書を掲げよう。煩瑣を避けて、一部省略し近い、「一部省略し近い」というに対している。

て引用する。対応する奥書同士がなるべく同行になるように並

	I man di
Ⅷ国会本奥書	Ⅱ龍大本奥書
	略)…仍起請文状如件。(,4) べし。//立申起請文事/右件元者上眇抄非実子者不可相承、…(中べし。//立申起請文事/右件元者上眇抄非実子者不可相承、…(中人相伝せんと思はゞ、此起請文の旨をまもりて、かつは道を重ず(本文末尾)一、此抄を無左右人に相承すべからず。さる間末代
抑此書者:(中略) 穴賢々々。/年月日/ 前左衛門佐基俊〈在判〉(1)	抑此書者… (中略)…穴賢々々。/年月日 前左衛門佐基後〈在判〉(,1)
く候。あなかしこ~~。//五条三位入道俊成/釈阿 在判(2)師匠より相伝の秘書一巻ゆづり奉り候。…(中略)…披露あるまじ	うあるまじく候。/釈阿〈在判〉(´2)師匠より相伝の秘書 巻ゆづりたてまつり候。…(中略)…ひろ
/俊成女越部尼御前//藤原氏女 在判(3)としごろ浅からず此道に…(中略)…披露なく秘し思はれ候べく候。	穴賢々々。/藤原氏女〈在判〉(˙3)としごろ浅からず此道に…(中略)…ひろうなく秘し思はれ候べく候。
此秘書は子より外に…(中略)あなかしこく、。//妙阿 在判(4)	
起請文如件。(6) 起請文如件。(6) "你可相承。…(中略)…你定申起請文/右件元者上眇抄非実子者、不可相承。…(中略)…仍	
言為世 在判(7) 当家相伝書:努々不及外見而已。/正安元年/二月十七日 前大納	以此本令書写校合畢。/応永廿六年九月九日/前上総介範政(,9)
右秘抄雖無直伝、彼作依為希代物、所秘蔵也。//義尚 御在判(8)	右秘抄雖無中巻、彼作依為希代物、所秘蔵也/(足利義尚花押)(,8)
月九日 前上総介範政 判(9)右一冊将軍家常徳院殿以自筆之本書写一校畢。//応永廿六年/九右一冊将軍家常徳院殿以自筆之本書写一校畢。//応永廿六年/九	
此一冊以光広朝臣本書写一校畢。//従三位長治 判(10)	

「た。さらに龍大本の奥書は上段との対応関係を考慮して、 順 奥書が変容して国会本のような形になったことは疑えないので

に,4・,1・,2・,3・,9・,8とした(右頁の表)。 書があり、その後に9今川範政奥書、10竹内長治奥書が続くと ここにあげた国会本のように7為世奥書に続いて、8義尚の奥 ~7と大凡同じものである。版本系(版本及びその転写本)以 国会本の奥書1~7は順序・本文ともに『悦目抄』の奥書1 『悦目抄』と同じ奥書を持つ諸本は、基本的に

四一九)年に範政が義尚の本を用いて書写することは、年代的 に不可能である。 れ、今川範政は永享五(一四三三)年没なので、応永二十六(一

たことを伝えているが、足利義尚は寛正六(一四六五)年生ま というのは、この奥書は、足利義尚筆の本を今川範政が書写し いう奥書構成をとる。これは明らかに改編されたものである。

れるものである。義尚の奥書が範政の奥書の後に来ており、こ 書・,8義尚奥書が書かれるが、 を記し、 『悦目抄』1~3と同じもの)を記す。その後に,9範政奥 方、龍大本はまず、4起請文(『悦目抄』6と同じもの) それに続けて,1基俊、,2釈阿、,3藤原氏女の奥書 義尚の所持奥書は自筆とみら

ちらが本来の順序であることがわかる。龍大本の転写の過程で、

る。

仮名序から、上巻が「大綱初心」、中巻が「大綱之大綱」、

と再び接触し、中巻として『悦目抄』が挿入されるとともに 奥書が『悦目抄』の持つ二条流のものに改編されたものと見ら 本に発する伝本の一つが、既に広範に流布していた『悦目抄 間に②の内容が挿入されたものと考えられる。要するに、龍大 本は①②③を完備している。これは、転写の過程で①と③との ある。また内容に関しては、龍大本が②を欠くのに対し、

瞭でわかりにくい。ある意味、 範政奥書の文中の「此本」が義尚自筆本を指すことになった。 「此本」という元々の形では、 範政が書写に用いた親本が不明 わかりやすい形に奥書が改めら

持する歌学書が三巻からなる書であると判断したものと思われ ていたらしいのである。恐らく義尚は序文によって、 巻の書であり、かつ中巻が欠けているものであることを認識し 無中巻」という文辞である。義尚は自らが所持するこの本が三 ここで注目しておきたいのが、龍大本の義尚の奥書中の「雖

れているとも言える

れる。同時に、,9範政奥書と,8義尚奥書の順番も逆転した

ようである。その結果、この二つの奥書が有機的に結びつき

本を「未改編奥書本」と呼び、国会本のような改編された奥書 気になるが、この部分の本文が改変されたのは間違いない)。 と改められている(国会本の「虫くひにて不正」という傍記は の諸本の奥書では本来「雖無中巻」とあった部分は「雖無直伝 中巻が補われて、三巻書として完全な形となっている国会本等 不完全なものを完全なものに再編するという意識によるのだろう。 れるのは、ごく自然なことであろう。『悦目抄』が補われたのは、 中に、中巻を補って完全な形にしようという意志を持つ者が現 ることを示す奥書が付されている訳だから、転写本の書写者の 無中巻」と記したものと見られる。一書として不完全な形であ れる。結果、義尚は中巻が欠脱していると捉え、所持奥書に「雖 たところから、内容③を灌頂巻、即ち下巻と見做したと思量さ 内容③の本文巻頭には「和歌灌頂に有覚」と記される。そうし また、仮名序末尾に「下巻もて灌頂の巻とする也」とあるが、 内容①を「大綱初心」、即ち上巻であると見做したのであろう。 が、龍大本の内容①は内題を「大綱初心巻第一」とするので、 下巻が「大綱引括」という名付けられているらしいことが判る 以下、龍大本をはじめとする改編されていない奥書を持つ諸 と称される名古屋大学本も同様の奥書構成をとる。この系統は、 同じ構成であるが、それに続いて5妙阿奥書が続く点が異なる。 氏女奥書と続く点は、本文に小異あるも、 異なる点が多い。1起請文、2基俊奥書、 た〈表〉には伝本を挙げていないが、三輪氏の言う「上眇抄系 ③を完備するもの には内容①③を持ち②を欠く伝本 書本とは、生成の過程において分岐したものと思われる。 目抄』の影響を受けていた訳だから、 他の未改編奥書本諸本の奥書よりも この5妙阿奥書は 統に属することになる。 本から③を独立させたものであるから、これも未改編奥書本系 の諸本は、前節で述べた通り、この①を欠く未改編奥書本の伝 を欠く伝本 (Ⅳ·V·Ⅵ) がある。また改編奥書本も内容①② く持っていることになる。『和歌無底抄』は生成の過程で 〈表〉に挙げていないものでは、 Ⅵの内閣文庫本も未改編奥書本の一種であるが、 (Ⅲ)と、①を欠く伝本(Ⅲ)が存する。 『悦目抄』の4妙阿奥書と同じものである。 内閣本と同じく「神宮本系 

を持つ諸本を「改編奥書本」と呼ぶこととする。未改編奥書本

にせよ、「神宮本系」の二本は、内容②③の本文も他の未改編

『悦目抄』の奥書を一つ多

この系統と他の未改編奥

何れ

3釈阿奥書、 296

他 の諸 ②③を持ち①

他の未改編奥書本と

奥書を持つ。この「従三位長治」とは、竹内長治(一五三六~ 奥書本諸本と異なる点が多く、異本的な位置付けをしておきたい。 ところで、改編奥書本は範政奥書の後に、「従三位長治」の その後は「光広卿」と称された筈だから、「光広朝臣」と呼ば

正十三(一五八五)年までである。この長治奥書の中に「光広 たのは、『公卿補任』によれば、天正八(一五八〇)年から天 一五八六)のことであると考えられる。竹内長治が従三位であっ

れるのが通例であるが、烏丸光広の叙従四位下は慶長四 そう考えた場合、問題が生ずる。名字朝臣は四位の人に用いら るのは、烏丸光広(一五七九~一六三八)であろう。ただし、 <u>二</u>五

朝臣」という名が見える。「光広」という名からまず想起され

九九)年十二月十一日であり(公卿補任)、長治の没後なので

る。この段階で光広の本を長治が書写するというのは不審である。 ある。そもそも長治在従三位期間に、光広は二歳から七歳であ そうなると「光広朝臣」が別の人物である可能性もあるが、

ではないだろうか。即ち「此 と同様に、ここでも奥書の順序の乱れが生じていると見るべき 一冊以光広朝臣本書写一校畢」と、

歌書を書写するような「光広朝臣」は他に見出し難い。8・9

れる。

六、

改編奥書本と挿入された

『悦目抄』

広は慶長十一(一六〇六)年正月十一日に参議となっており、

は本来別個の奥書であったものと考えたい。光

従三位長治

周知の通り、『悦目抄』 行われたのは、 れたのはそれ以前ということになる。そうすると奥書の改編が 慶長年間以降、即ち江戸期であると考えられる。 は江戸期には盛んに書写され、 重んじ

られていた。また二種の版本も板行され、流布していた。なの も中巻に相当する部分を欠いた不完全な書であることに不審な で、江戸期において、龍大本の転写本が、三巻書を謳いながら

した誰人かが、奥書が『悦目抄』と似ていることに着目し、こ

と、非二条流の奥書が二条流のものへと書き換えられたことに b 目抄』を挿入して完全な三巻の書物として「再生」させ、 の中巻にあたるのは『悦目抄』であると考え、①と③の間に 『悦目抄』式に改編したということであろう。形だけを見る

とは直ちには言えないだろう。この問題については後に少し触 なるが、書物に二条流の性格を付与する意図が改編者にあった

ところで、改編奥書本諸本の内容② (『悦目抄』 部分) の最

はからふべし たれる人のすべき也。あなかしこく~。よくく~思ひ 是こそほうびのある事なれ。かやうの事はよくくい 錦の袋に入て、宝物として、くびにかけて持たりけり。 範永あまりの感にたへずして、その草案をこひとりて、 れりければ、範永が哥をふかく感嘆して、草案のはし てこもりゐられたりける北山の長谷と云所へ見せにや 件の懐紙の草案どもを中納言とりて、公任卿の出家し とおほせくだされて、れうの御馬を給てのち、 にてまからざりけるを、主上うらやましくおもふらん 事をよみけるその中に教長朝臣がその夜しも殿上の番 かりて山家秋月といふ事をよみ侍りけり 「範永誰人哉、 人〈〜遍昭寺にて月見侍けるに、 とふ人もなき山里の秋の夜は 月のひかりもさびしかりけり 和哥得其体」と書付られたりけるを 国会図書館蔵本 山家秋月とい 山へま Š 誰人哉、和歌得其体」と書つけられたりけるを、範永になる。 思ひはからふべし。 くくいたれる人のすべき也。あなかしこ、く、。能々 これこそほうびのかひ有ことなれ。かやうのことはよ の袋に入て、宝物として、くびにかけてもちたりけり。 あまりの感にたへずして、その草案をこひとりて、錦 ば、範永か哥をふかく感嘆して、草案のはしに、「範永がない。 もりゐられける北山の長谷と云所へみせにやれりけれ 件の懐紙の草案を中納言とりて、公任卿の出家してこくだんくはいしょうかん 秋月といふことをよみ侍けり ほせ下されて、れうの御馬を給てのり山へ罷りて山家 てまからざりけるを、主上うちやましく思ふらんとお をよみけるその中に教長朝臣がその夜しも殿上の番に とふ人もなき山ざとのあきの夜は 人々遍昭寺にて月見侍けるに、山家秋月とい 月のひかりもさびしかりけり 版本『和歌無底抄』 ふ事

引用する。参考までに版本『和歌無底抄』の同じ部分も併せて 終項目の本文には特徴的な誤写がある。Ⅷ国会図書館本の形で

掲げる (右頁の表)。

『悦目抄』は本来ならばこのあと跋文が続くが、

内容③

るが、傍線部に「教長」とあるのは、明らかに「範永」の誤り の跋文と本文的に重なるのためであろうか、省略されている。 引用部は、『十訓抄』を典拠とする藤原範永の和歌説話であ

諸本は共通してこの部分を「教長」と作っているのである。内 であると思われる。ここに挙げた国会本以外でも、改編奥書本 いた本があり、それを「教長」と漢字を当てたため生じた誤り である。これは単純に「範永」を「のりなか」と仮名書きして

佐々木孝浩氏蔵本やV陽明文庫本などの未改編奥書本諸本の内 の事情で内容①が欠けてしまったものであろう。そもそも、 容①②③を完備する伝本と同系統であることがわかる。何らか 第二節で説明したように改編奥書本の内容②とは別系 TV

容①を欠くⅡ群馬大学本も同様であることから、国会本等の内

名序の有無等の種々の相違はあるものの、 奥書本諸本が持つ奥書8・9・10こそ持たないほか、巻立・真 また、下段で示した版本も同様に誤っていることから、改編 版本『和歌無底抄』

統とであり、この説話を載せていないのである。

略し、 Ł 諸写本が版本の写しでないことは明らかである。とすると、① ②③を完備した改編奥書本を板行の為に十巻に分かち、序を省 改編奥書本の類であるとわかるのである。上記の異同から、 奥書を改め、「和歌無底抄」という題を付けたものが

あることはすぐにわかる。『悦目抄』は江戸前期に二種の版本 本系とがあるが、改編奥書本の内容②を通読するに、 か、特定することは出来るだろうか。『悦目抄』は広本系と略 版本『和歌無底抄』ということになろう。 では、挿入に用いられた『悦目抄』が如何なる本であったの 略本系で

見ると、 ここで、正保二(一六四五)年版本の範永説話部分の本文を

本系に属す。

が刊行され流布したことは既に述べたが、この二種の版本は略

その中に、教長朝臣がその夜しも殿上の番にて…(以下省 人々遍昭寺にて月見侍けるに、 山家秋月と云事をよみける

略

の書写と見られるものは未見である。版本『和歌無底抄』 写と思しきものである。少なくとも正保年間を確実に遡る時期 のである。現在確認し得た改編奥書本は、 と、改編奥書本諸本と同じく「範永」を「教長」と誤っている 皆江戸中期以降の書 の刊

れた可能性が高い。 が経過している。即ち、改編時に挿入された『悦目抄』本文に 行も延宝期であり、 正保二年版本もしくは非常に近い関係にある写本が利用さ 正保二年版 『悦目抄』の刊行後、約三十年 再び生まれた。その本を十巻構成にして、『和歌無底抄』と改

が参照されたことになる。 と考えた場合、奥書に関しては、この正保版本以外の『悦目抄 書はそのような形は取らないので、正保二年版本が利用された 名のみ記すという特異な形を取る。しかし改編奥書本諸本の奥 までを記した後、起請文の本文と為氏奥書を省略し、為氏の署 正保二年版本の奥書は、 1基俊奥書から5為氏奥書

に近い写本)により②を補った結果、①②③を完備する写本が した者が、中巻として正保版本『悦目抄』(もしくは正保版本 の所持した龍大本の転写本が中巻を欠いていることに不審を為 に失われてしまったと思しく現存していない。その後足利義尚 ②③の内容を持つ伝本が流布した。全てを完備する伝本は早く のものを利用した。その後室町期には①③の内容を持つ伝本と 段階において、 いてまとめると次の通りである。『和歌無底抄』は生成の初期 ここまでの考察の結果を踏まえて、『和歌無底抄』諸本につ 『悦目抄』の影響を受けて、奥書に『悦目抄』

> 期からは遙かに下った、江戸期に整えられたテキストであり 学大系』第四巻の活字テキストの底本となっている。『日本歌 利用の際には注意が必要である。また、はじめに述べた通り 学大系』は、唯一の活字テキストという点で貴重ではあるもの 題したものが延宝版本『和歌無底抄』であり、これが の、その底本とする版本は、テキストが成立したであろう鎌倉 『日本歌学大系』同巻は『悦目抄』も翻刻するため、 内容②の 『日本歌

は考えられないけれども、 四~七を補うことは出来ないのである。 目抄』を利用しても、 ない略本系『悦目抄』であるので、『日本歌学大系』同巻の 目抄』は所謂広本系に属する応永三十二年本が底本となってい また、『和歌無底抄』は、 版本『和歌無底抄』の巻四~七の基になったのは記事の少 厳密な意味では版本 ②に『悦目抄』が挿入されたのは江 『悦目抄』と別個に成立したものと 『和歌無底抄』

戸期とみる点に関しては、部矢氏の見解は妥当であったのである。

る。

部分は翻刻されていない。しかし、『日本歌学大系』

七、 冷泉流の書として

大本のように起請文・基俊・釈阿・藤原氏と続いて、二条家の ともあれ、以上の検討により、『和歌無底抄』諸本奥書は、龍

人名を記さない未改編奥書が、古態を示すことが明らかになった。

を借用しているのが考えるのが妥当で、奥書を借りるに際し、 第二節で述べた通り、和歌無底抄系諸本は『悦目抄』の奥書

てくることによって、起請文の記者が為氏から基俊へと改めら 除した、ということになる。また、起請文を基俊奥書の前に持っ 『悦目抄』にあった為氏・為世という二条家関係者の奥書を削

原初的には非二条流において作られた歌学書ではなかったかと 諸本は、『悦目抄』という為世流の秘伝書に拠ってはいるものの、 格を消そうというものとしか思われない。即ち、『和歌無底抄』 れている。これらの処置は、意図的に「二条家の書」という性

深い点に気づく。 そこで、原型に近い未改編奥書本諸本の奥書を見ると、興味 Ⅳ佐々木孝浩氏蔵本は室町期の書写になる注目すべき伝本で

思われてくる。

あるが、左のような相伝系図が付されている。 釈阿―藤 原 氏 ― 為相―康成 (5) 像威卿女ごしべの尼公竜 為氏舎弟 三条郷少将伯(注5)

という傍記を手掛かりにすれば、神祇伯家の資宗王の男に源康 成という人物がいるが(尊卑分脈)、為相よりも一世代上の人 れたという「康成」については未詳である。「三条源少将伯 泉家の祖として著名な冷泉為相のことだろう。為相から伝授さ ここに登場する「為相」は二条為世と対立関係にあった、冷

二六四)年に三十九歳で没している。為相の生没年は弘長三(一

物であり、年代的にやや不審。兄弟の神祇伯資基王は文永元(一

二六三)年~嘉暦三(一三二八)年である。実際にこの書の相 伝に冷泉為相が関わっていたというのは、非常に疑わしく、こ

の相伝系図は偽作と考えた方が良いだろう。しかし、為相の名

伝来に関与した可能性を示唆する点で無視できないものである。 に権威を見出すような、いわば冷泉流と呼ばれるような人々が また龍谷大学本奥書5に今川範政の名が見える点も重要であ

る。今川範政は応永期に多く典籍の書写校合を行っており、応

して名高い今川了俊の兄範氏の孫に当たり、自身も冷泉派の歌 かであろうと思われる。この範政は冷泉為秀門下の武家歌人と 永二十六年に未改編奥書本『和歌無底抄』を書写したことは確

しないけれども、 人である。範政が如何なるルートで親本に接したのかは判然と 『和歌無底抄』は冷泉派歌人の周辺に流布し 参照したのではないかと思われるが、

きたい。陽明文庫本は室町後期頃の書写と見られるが、1~4 同様の例として、 冷泉派歌人である正徹の名が見えるという点も指摘してお 〈表〉にVとして示した陽明文庫本奥書6

ていたらしい。

在判」と記す。さらに、この本は後見返しに花押が五つ書かれ 卷書之其一歟。尤重宝之抄也。普不可外見也。/千松末葉正徹 眇抄下」と尾題を付し、その後に6「此一帖、左金吾基俊号三 に他の未改編奥書本諸本とほぼ同様の奥書を記した後に5「上

写したものかと思われる。その内の一つに「此内如此也」と傍 同一の花押 ている。この五つはそれぞれ僅かに異なるが、酷似しており、 (恐らくは親本に存した正徹の花押であろう)を模

庫本の親本は正徹真筆であった可能性が高い。また、 に見られる花押と比較すると、 書蹟大鑑』第七巻 出来た」ということであろう。この花押を、小松茂美編 (講談社、一九七九)所収の「94 類似が認められるので、 正徹書状 正徹の奥 陽明文 『日本

記する。「これが五つの内最も親本の花押に似せて書くことが

えたい。

書中に「左金吾基俊号三巻書之其一歟」とあるのは、

仮名序を

表

を見ると、

内容①および②の有無は伝本により異なる

を欠いた伝本にも接していた可能性が高い(「其一歟」という ない。そうすると、正徹は、龍大本のように両序を持ち内容②

陽明本には仮名序は存し

ようである)。 物言いからすると、三巻全て備える伝本には接し得てはいない 何れにせよ、このように、未改編奥書本は、 龍大本のような

②を欠く形態のものも、佐々木氏本や陽明本のような①を欠く 形態のものも、室町前期から中期にかけて、二条派よりもむし

る。原初的には、『和歌無底抄』系諸本は、『悦目抄』 ろ、冷泉派歌人の周辺で流布していた形跡が見られるのであ の影響を

受けつつも、 が高いのである。 次節では、それを内容面から裏付けることが出来るのか、 冷泉流の周辺で成り、 流布した書物である可能性

『和歌無底抄』 ③「古今和歌序」本文

から考える

考

このことから、 が、内容③に関しては何れの伝本も持っていることがわかる。 『和歌無底抄』の核といえるのは③であると言っ 諸本の③の「古今和歌序注」がどのような立場をとるか、見て

てよいだろう。この書を考える上で、最も重要なのは③の部分

三つの部分からなる。このうち「古今和歌序」というのは、古 内容は「人丸奉行念誦次第」「伊勢物語極秘」「古今和歌序」の この③の部分は「和歌灌頂に有覚」と端作して始まるもので、

と言えよう。

かという点で、二条家説、冷泉家説は異なるのである。これら するか、という点、さらに「ならの御時」にどの天皇を当てる もつくるなり」という部分の「たゝず」「つくる」をどう解釈 名序の「いまはふじのやまもけぶりたゝずなり、ながらのはし 序には、二条家説と冷泉家説の相違する箇所がある。古今集仮 今集仮名序の問答形式の注である。周知の通り、古今集の仮名

すなわち「立たない」と解していた。それでは『和歌無底抄 ものであるが、二条家は「絶えず立つ」という意味で「不断 立場をとっているか、確認してみたい。 (絶)」と解釈するのに対して、冷泉家および京極家説は「不立」 まず、「たゝず」については、「不立不断論争」として有名な

の解釈について、『和歌無底抄』③「古今和歌序」が如何なる

ように述べる。 みよう。「たゝず」の解釈に関して、③「古今和歌序」は次の

又「ふじの山も煙もたゝずなり」とは、是にやうく~の二 んきの煙もた、ずといはひて申たる義なり。一には不断の しくありしなり。されば、延喜の御時目出き御代にて、き 義あり。一には、たえたる義也。たえてあるといふ事の久

ませば、禁忌のけぶりた、ずなりとは、貫之かけるなるべ りて、けぶりのことはよみならへるなるべし。それ、ふし かるに、かのかぐや姫ふししばの煙よりはじめてことおこ 義也といふは、たとへばふじのけぶりはたゝぬ事なり。し しばのおこりが禁忌の事也。さればこの御門賢王にてまし

て侍るを、「けぶりはたゝずなり」とは、たえぬ義にてた ぐさめける」と哥をほめ、御門をほめたてまつることばに ながらのはしもつくるなりときく人は、哥にのみぞ心をか し。しかるをある義に云、「ふじのけぶりもた、ずなり <sup>-</sup>けぶりもたゝず」とばかりあらば、せめては「さびしさ えずたつ心にて侍と申人侍りき。この義おほきにちがふ也

にけぶりをだにもたゝじとて」の哥の詞におもひなぞらふ

なり。「なり」の字が此哥の肝心に侍る時にゆめ~~よのべきに、「たゝずなり」の「なり」の字が此詞にはちがふ

義につくべからず。哥のならひ、花をば雲といひ、雲をば

真実にはけぶりにてはなし。かの山のいたゞきに池あり。雪といふ事なれば、「ふじのけぶり」とよみならはせるも、

のたつが、けぶりにはたがはずみゆるなるべし。それをけいつも雪ふりつもれり。日のうら、かなる時は、池より気

がりとよみならはせるなり。されば、むかしよりいつか不断にけぶりたつ事侍る。「たえずたつ」と定りていはん人は古今を委細に相伝せざる物なるべし。信ずべからず。されば、当時もけぶりににたる間、たつとのみおほくよみたり。しかればよの義はしらず、古今集のごとくはた、ぬとり。しかればよの義はしらず、古今集のごとくはた、ぬとり。しかればよの義はしらず、古今集のごとくはた、ぬとり。しかればよの義はしらず、古今集のでとくはた、ぬといばんが本なるべし。かぐや姫の後はたえて久しき事にていばんが本なるべし。かぐや姫の後はたえて久しき事にていばんが本なるべし。

「たえずたつ」という二条家流の説は間違いで、「たえたる儀立たないとして、帝を誉める言葉であるとし、「たえぬ(不断)、生』序のこの部分に関しては、延喜帝は賢王なので禁忌の煙も「たゝず」に関しては、二説あることに言及した上で、『古今

「たゝぬ(不立)」という冷泉家と同様の説をとるべきであると

みよう。この「つくる」に関しては、本来は二条家も冷泉家も続いて、「つくる」に如何なる注が付けられているか、見て主張している。これは明らかに冷泉家説寄りであると言えよう。

序」には次のようにある。 の解釈が主張されるようにもなったようである。③「古今和歌「作(造)」の解釈を採っていたが、二条家末流の者により「尽」

かけるをみて、 に長良の橋の柱のあしの中よりくち残てたてるやうをゑにに長良の橋の柱のあしの中よりくち残てたてるやうをゑにいいるだる也。そのゆへは拾遺抄の哥に、内裏の障子一、「長良のはしもつくるなり」とは、是に二の義あり。

つのくにのながらのはしもつくる也今は我身をなに、た此哥の心にてはつきたる義也。一には哥に云、なりけり

と云哥の心也。此義にて作也。両義ともに不違。其謂は、ふりなん

古今・拾遺の中の間の時代をかぞふれば、

世は六代、

ずなり、ながらの橋もつくるなりときけば哥にのみぞ」と ず、ながらの橋はつくる」といふべきに、さはかゝで、「たゝ くちにける事をよめるにや。しかるに「富士の山は煙たえ」 かへられしことをかき、拾遺にはかの橋の八十余年が間に 八十一年にあたれる也。されば此序には、 いへるなるべし。和哥の道をひろくをもく申侍りけるなり。 かの橋をつくり

先の「たゝず」同様、「つくる」に関しても「作」・「尽」の 古今にも此心なるべし。

るのではないだろうか、と述べる。要するに古今序では 遺集』では「くちにける事」、すなわち「尽」の義で詠んい と」、即ち「作」の義であるが、そこから八十年余り経た『拾 両説を取り上げた上で、『古今集』では「つくりかへられしこ

冷泉家説では「聖武」となる。③「古今和歌序」では りである。「ならの御時」の帝については、二条家説は「文武」 「ならの御時」の天皇を誰と比定するかについては、次の通

(造)」説を採っている訳である。

君も臣も身をあはせたりとなんいふなるべし、如何。 ひろまりにける。かの御代や哥の心を… (中略) …これは

一、問、いにしへよりかくつたはる事はならの御時よりぞ

は、万葉集を撰はじめて、よにおほくの哥をかきあらはし 答云、かのならの御時よりとは、 聖武天皇也。ひろまると

とある。傍線部の通り、「聖武天皇」という説を採っている。 て、 人にしらしめたまふなり。… (後略)

文武天皇説は挙げられていない。ここでも冷泉家説寄りの説を

採るのである。 冷泉家流説·二条家流説·③ 「古今和歌序」が件の箇所にお

いてどのような説を採っているかをまとめると次のようになろう。

本書の生成の時期と重なるであろう、為世・為相の時代の二条 室町期になると様々な注釈があらわれ状況は錯綜してくるが、

\*「つくる」を「尽」とするのは二条末流(『頓阿序抄』など)の説

冷泉両家の説は、この表の通りとみて大過あるまい。これを見

305

うことは明白であろう。れば、③「古今和歌序」が二条流説よりも冷泉流説に近いとい

言う、二条家流の解釈に対して、「この義おほきにちがふ也」「古今和歌序」本文の波線部である。「たえずたつ(不断)」とさらに注目すべきは先に「たゝず」について述べた引用部③

張し、自家説の正統であることを主張するものである。『和歌口調で攻撃しているのである。これは他家の説の非正当性を主

と言い、さらに「古今を委細に相伝せざる物なるべし」と強い

ctsi) 立時期も、二条・冷泉の両派が相争っていた、為世・為相の存の歌学書としての性格を持つものであったと考えられよう。成無底抄』は、本質的には、非二条流にして、冷泉流に近い立場

『悦目抄』との関係を言うと、奥書を借用している訳だから、命時期から隔たらない時期であると推測される。

猶、改編奥書本系統の諸本は、奥書だけ見れば二条流を装っということになる。 【悦目抄】をとりこみつつ、成ったもの、る為世流の伝書である『悦目抄』をとりこみつつ、成ったもの、る為世流の伝書である『悦目抄』をとりこみつつ、成ったもの、

から二条流の説へと改められるということは無いという点も指ているのであるが、本文に関しては、右の三説が、冷泉流の説

目抄+上眇抄)を乙類、

i上眇抄系を丙類、

v 神宮本系

持つ『悦目抄』の奥書を、『和歌無底抄』未改編奥書よりも信者にはそのような意識は無く、広く流布してそれなりの権威を流のものに変容せしめているかのようであるが、必ずしも改編重要である。奥書の改編により、冷泉流の性格を歌学書を二条摘しておきたい。この事実は奥書の改編者の意識を考える上で

おわりに

かと思われる。

頼するに足るものと見做したということに過ぎないのではない

で説明した三輪氏の分類でいうところのヨー子伝系三巻本が改考察で判明した点を踏まえて、諸本を図式化しておく。第三節的な整理にはもとより限界があろうが、最後に、本稿における『和歌無底抄』という歌学書は、書物の性格上、諸本の線上

一子伝系二巻本(題論+上眇抄)を甲類、iii一子伝系二巻本(悦本・大東急本)を第二類とする。未改編奥書本については、iv内容①②③を備えるものを第一類、内容①を欠く伝本(群馬大

編奥書本、それ以外が未改編奥書本となる。

改編奥書本の内

2』のようになろう。(注33) 整理したためである。しかし、今回の諸本比較により、二条為 複雑な諸本状況は指摘しつつも、「為世流」という大枠の中で 為氏・為世の奥書を持つ延宝版本を底本しており、三輪氏も、 かった。というのも、一般に流布している『日本歌学大系』は ·v····鸿鷺箱極秘抄系)を異本系と名付ける。図示すると、【図 『和歌無底抄』は従来は二条為世流の伝書としての印象が強 輪氏の分類でいうところのv「神宮本系」とw・w「鷺箱極秘 意しておきたい。 た。これらの点は、今後『和歌無底抄』を資料として扱う際留 原初的形態からかなり変形したものであることも明らかとなっ が見えてきた。また、『日本歌学大系』が底本とする延宝版本は、 れとは対立する冷泉流において成立した書物であるということ 一方で今後考究すべき課題も多い。まず、異本系とした、三

世流の伝書である『悦目抄』の影響を受けながらも、実は、そ

抄系」については具体的な考察が出来なかった。【図2】では



て考えてみる必要があるだろう。それから、序文において示さ 線条的に示してしまったが、異本系Aと異本系Bの関係も改め 蔵・清水光房 『和歌無底抄考』―改題と翻刻」(『中世和歌

まである。また、本稿では『和歌無底抄』に焦点を絞ったが、 れる三巻の内容構成と原初的形態との関係についても不明なま

え直しも必要であろう。

『悦目抄』をはじめとする、

『悦目抄』系歌論全体においての捉

によって考究してゆきたい。 難ではあろうが、今後さらなる諸本とその本文を検討すること して判然としない部分が多くある。全てを明らかにするのは困 このように『悦目抄』系歌論の問題は非常に複雑で、依然と

注

(1)三輪正胤氏 が為される。本稿の全般において同書を参照するところが 三章第三節「為世流」において『悦目抄』系について考察 『歌学秘伝の研究』(風間書房、一九九四)。第

(2)三輪氏前掲書二三五~二三六頁

に拠る。

(3)同書については、川平ひとし氏「天理大学附属天理図書館

近世期の研究ではあるが、極めて実証的な考察が為されて テキスト論』付属 CD - ROM 所収、笠間書院、二〇〇八)。

(4)引用は、龍谷大学蔵『大綱初心』(21・391) による。

おり、示唆的な点は多い。

古写本である。 大本については後述するが、両序を有する伝本の中では最

(5)「『悦目抄』 『和歌無底抄』の諸本の様相と課題」 (『軍記語

なる。ただし論を進めるにあたって、本稿とは異なる部分 問題点について述べた第二・三節が、本稿第二節と概ね重 な伝本状況を示したものであるが、先行研究の紹介とその 論歌学書」の一例として『悦目抄』『和歌無底抄』の複雑 り物研究』50号、二〇一四)。同論稿は「非正統的」

多かった。猶、以下本稿で言及する三輪氏論はすべて同書 もあるので、併せて参照されたい。

を引用し、本稿では略述した点について詳述している部分

(6)三輪氏前掲書第三章三―四「諸本論にかえて」。

(7) 『和歌三重大事』については、三輪氏前掲書のほか、 『和歌三 酒井

重大事』」(『研究と資料』45、二〇〇一)も参照 茂幸氏「『和歌三重大事』の諸本と成立 付校本

(8)広本系と略本系の異同については『日本歌学大系』所収の 歌無底抄』の伝本整理は今後の課題としたい。猶、

ける『悦目抄』引用は同本に拠る。 研究所斯道文庫に所蔵される。特に断らない限り本稿にお た久曽神昇氏旧蔵応永三十二年本は現在慶應義塾大学附属 「改題」を参照されたい。猶、『日本歌学大系』が底本とし (4)下冊尾に8「延宝第四仲夏日/ 林文蔵板行」と刊記が 写されていることから明らかである。

文学論叢』38、一九九三)。

(9)「龍谷大学所蔵「足利義尚所持本『大綱初心』」について」(『国

(10)陽明文庫蔵『上眇抄』(近24·31)、佐々木孝浩氏蔵『和歌』

(11)三輪氏はここに陽明文庫蔵『上眇抄』の下巻も挙げている が、やはり陽明文庫本はii一子伝系二巻本(悦目抄+上眇 (外題) がそれに当たる

には挙げない。 抄)に属する伝本であると考えられるので、本稿ではここ

(12)以下列挙する伝本は、実見もしくはマイクロ資料により確

は、「カ」を付した。 イクロフィルム・紙焼き写真の印象により推定したものに 認したものである。書写年代について、原本未見のためマ

(13)出版者を「林文蔵板行」とする伝本も存する。 で、「林文蔵」とある方が後印のように思われるが、版本『和 両者は同板

形跡がある書名で、少なくとも『和歌無底抄』よりは適切 すように『了俊歌学書』等に見え、古くから行われていた 左兵衛刊本(第4門48・10)に拠る。 おける版本『和歌無底抄』の引用は東北大学狩野文庫蔵林

(15)刊記こそ写されないが、漢字仮名の宛て方に親近性が認め られるほか、一部ではあるが版本に存したと思しい振り仮

(16)「神宮本系」の本文の特殊性や他の伝本との異同につい 支えないだろう。 名がそのまま見えることから、版本の転写本と考えて差し

(17)龍大本をはじめとして、「大綱初心」という内題を持つ伝

全体を包括する題とすることは出来ない。同様に「上眇抄」 本が多いが、これは内容①のみにかかる題であろうから

は、三輪氏前掲書に詳述されているので参照されたい。 は聊か難がある。版本『和歌無底抄』内題が「一名」とし も内容③のことを言うものと考えられ、通行書名とするに て示す「一子伝」という題に関しては、後に注 (25) で示

309

ではあろうが、如何であろうか。この問題は今後の課題と

(18)基俊奥書のみを記す宮城県立伊達文庫本等の例外もある したい。

が、それは転写に際して奥書が省略されることによって生

じたものと見て良いだろう。

(19)名古屋大学本の奥書構成は次の通り。年記・署名部分のみ

を並べる。

2年月日 1立申きしやうもんの事 前左衛門佐基俊在判

3年月日 釈阿在判

4嘉禄元年月日 藤原在判

5弘安二年春日

妙阿在判

6正安四年七月下旬

7 查 嘉曆三年七月十八日於宮中之宿館以或人之証本

8同月廿五日一校畢

9 號応安七年卯月一日…皇太神宮祢宜荒木田神主経直

在判

10応永十三年三月九日 在判

卯月廿三日書之

11皇太神宮祢宜荒木田経博神主

主桂覚/于時文明五年

13天文三平,年沽洗十三日上章執徐 12天文二年季秋日書之 藤沢二寮弥阿

春行軒於鳩原被写

畢/右筆宋竹入道

14弘治元年卯月清書之 净阿上人

うち6は『悦目抄』には見えない独自の奥書であるので、6に この1~6までは内閣文庫本と同じ奥書となっている。この

書本とが分岐した時期の目安となろうか。

見える「正安四年」という年記が、この系統と他の系未改編奥

(20)現存伝本の多さがそれを裏付ける。

(21)正保二(一六四五)年刊『悦目抄』と寛文六(一六六六) 年刊『更科記』の二種

(22)正保版本『悦目抄』の引用は慶應義塾図書館蔵本 124 •

6・1)を利用した。

(23) 奥書の他にも、証歌の順番が異なる等の微細な異同も指摘 はなく、そのもとになった写本と近親関係にある本である 出来る。このような点を考慮すると、正保版本そのもので

ように思われるが、断定は出来ない。

(24)既に述べたとおり、 内容①の前に存する仮名序の語る書物

全体の構成と同様な構成をとる伝本は現存しない。この

問題について清水光房『和歌無底抄考』は、「此作者ハジ

次々物セント思ヒツレド、力オヨバデ半ニシテヤミシ、ド メ先サマぐ~ノ事ドモ書テント思ヒ企テ、名目ヲ立オキ

セル本モアリツレド、錯乱シ、且脱落セシニモアラン歟」(前 ケナキ草稿ノ世ニ伝ハレル歟。又ハ右ノ題目ノ如ク序デナ

掲の川平氏翻刻による)と述べる。内容①の内題が「大綱

物に増補を加えて成ったもの、という印象が強い。何れに にも見えないことから、未完成のまま流布してしまった書 初心巻第一」とあるにも関わらず、「巻第二」以降がどこ

せよ、原初的形態がどのようなものであったかは不明、 つ現在確認し得る諸本からそれを窺うことは困難である。 か

版本『和歌無底抄』に存する仮名序は、この全体構

成を説明する部分の本文を欠いている。この序の述べる全 合性をとるために削除されたとみて間違いない。 体構成は、 実際の構成とは異なる訳であるから、 全体の整

(25)筑波大学本にも同様の相伝系図が存する。筑波大学本には 佐々木氏本と同様に6「文保元年八月廿二日書之」という

> ある点が異なる。 奥書を記すが、その後に朱筆で「同九月一日移朱点了」と

(26)井上宗雄氏 『中世歌壇史の研究 室町前期〔改訂新版〕』

間書房、

一九八四)

参照

(27)今川了俊『了俊歌学書』の「回文哥」について述べた部分

見ていたものと見るべきだろうと思われる。 目抄』ではなく、未改編奥書本『和歌無底抄』の内容②を 以下『悦目抄』の内容を踏まえた記述があるが、これは に、「基俊朝臣の一子伝と云記を披見して納得せり」と述べ、 『了俊歌学書

(28)片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』 文堂、一九七一~一九八七)参照 全六巻七冊

本文は冷泉家時雨亭叢書に拠る

(29)以下、本文の引用は龍大本を用いる。

(3)小川剛生氏「南北朝期の二条家歌人と古今注説-庫蔵『二条為忠古今集序注』をめぐって―」(『明月記研究 一九九八)参照 東山御文

)例えば、下冷泉持為の講釈を伝えるという所謂 は冷泉流の注とは言えるが、「たゝず」について「不断 「持為注

31

説を採っている。

3

(赤尾照

態の『和歌無底抄』は出来上がり、流布し始めていたと見八月廿二日」が見える。為世・為相と同時代に、原初的形月下旬」という年記があり、Ⅳ佐々木氏本には「文保元年(32)〈表〉で示したものでいうと、Ⅵ内閣文庫本に「正明の日本代(32)〈表〉で示したものでいうと、Ⅵ内閣文庫本に「正明の日本代(32)〈表〉で示したものでいうと、Ⅵ内閣文庫本に「正明の日本代(32)〈表〉で示したものでいうと、Ⅵ内閣文庫本に「CHIOOD)

(33)三輪氏は鷺箱極秘抄系については、一巻本と二巻本に分けられる。

で、まとめて「異本系B」とする。と二巻本の諸本については具体的考察を行っていないのと二巻本の諸本については具体的考察を行っていないのと二巻本の諸本については、一巻本と二巻本に分け

「附記」本稿は、二○一三年八月に行われた軍記・語り物研究【附記】本稿は、二○一三年八月に行われた軍記・語り物研究れた、シンポジウム「〈諸本〉研究の可能性」における口頭和表に基づき、大幅に加筆・訂正を加えたものである。席上発表に基づき、大幅に加筆・訂正を加えたものである。席上発表に基づき、大幅に加筆・訂正を加えたものである。席上発表に基づき、大幅に加筆・訂正を加えたものである。席上発表に基づき、大幅に加筆・訂正を力を換明文庫、国立関本である。

孝浩先生には、御所蔵の資料の利用を許可いただいたほか、

成稿にあたって数多くの御助言を賜った。記して謝意を示す

次第である。

— 312 —